

■癒しの光

次に宿泊した「アマンダリ」は、最近雑誌多く特集が組まれる「アマンリゾート」のホテルで、バリ島で三つあるアマン系ホテルの最初にオープンしたホテルである。こちらは、純粋なバリスタイルの村落をイメージして造られバリの伝統的な様式を生かしたものになっている。ヴィラ形式のゲストルームをつなぐ通路は迷路のように曲がりくねり、同じ景色が存在しない。初泊の「フォーシーズンズ・リゾート・バリ・アット・サヤン」である程度リゾートホテルの明かりを解ってここへ来たつもりであったが、ここにはさらに本格的な雰囲気がかっこいい、一つ間違えると「ただ古臭いだけ…」に感じられてしまうぐらいの空気が流れていた。ただ細かく観察していくと、ゲストルーム全体にさりげなく演出されている。センターテーブルに盛り付けられたウェルカムフルーツ。ベッドメイキング時にそとと枕元に置かれた手作りのカードと人形。そんなもてなしが宿泊する人を魅了する。非常に控えめでありながら品の良い装飾は効果的な照明で適度に照らし出され、外に見える夕闇と美しいコントラストを見せる。それらは特別な明かりを用意しているのではなく、原始的な手法に過ぎない。ただ周辺の自然との調和が美しいのである。夕暮れ時に足を運んだレストランでは、白いテーブルクロスの上に蝋燭の灯りがともしプールサイドのヴァレ（東屋）ではリンディの演奏がゆったりと流れ、遠くに見えるジャングルを眺めながらディナーをとる。こんな時間が非日常的で贅沢な時間を与えてくれる。蝋燭の炎を見つめ、自然の闇を見つめ、それら全てが「癒しの光」となって包み込んでくれている。（田中 謙太郎）



天蓋 + スクリーン付のベッド



ベッドルームの随所におもてなしの心遣いが



プールサイドのヴァレ（東屋）



陰影が美しいアマンダリ内のレストラン

第19回街歩き

2003年07月29日

大江戸温泉物語

■街歩きレポート・その1

7月29日(火)に大江戸温泉物語に行ってきました。大江戸温泉物語は、2003年3月にオープンした銭湯のテーマパークです。湯けむりのあかりというテーマで、日頃の疲れを癒しに大勢の方が参加してくださいました。大江戸温泉物語は、巨大な現代建築が建つお台場に、地上2階建て・容積率30%という小ささの、鉄骨造の寝殿造りといった変わった意匠の建築です。この施設はテーマパークということなので、インテリアという限られたスペースの中に江戸の世界をどう再現するかが建築および照明計画でのメインのテーマになったと思います。

畳敷きのエントランスホールで通行手形を購入します。そして、越後屋という場所で自分の好きな浴衣を選び、着替えてから入館します。きっと浴衣での街歩きというのも初めてだったことでしょう。

中に入ると、広小路とよばれる江戸の街並みを再現した場所にです。ここは、施設の各エリアにアクセスするための核となる場所で、周囲には映画のセットのような食事処やおみやげ屋が建ち並んでいました。館内の照明は、江戸をテーマとしていることもあり、色温度も低く、暗めでした。照度を測ってみると、通路中央で約5lxと、屋内としては低く、屋内なのに屋外の街路という想定で計画されていると思われます。

次に、足湯に行きました。足湯は屋外にあり、



1



2

施設で唯一外部と接点をもつ場所です。足湯からは、日本風の東屋ごしに、お台場の一部のビルの夜景や低い位置を飛ぶ飛行機などがみえ不思議な光景でした。団員からは、このミスマッチがいいという声も聞かれました。

館内の和風レストランで食事をしました。レストランの照明は、普通の色温度が高く明るい照明でした。面出団長からは、好きな浴衣を選ぶように、好きな照明を選べるとよいのではないかと、という意見もありました。ためしに暗くしてみても、ということで、照明を消したところ、配膳ができないので点けてください、と言われる一幕もありました。

食事の後は、全員浴衣で記念撮影をし、解散しました。いつもちょっと違った街歩きだったと思います。(菅又 健雄)

■街歩きレポート・その2

“湯煙温泉ツアー”。今回の照明探偵団街歩きは、この言葉に心揺さぶられ参加しました。温泉という場所は、人の疲れを癒し、元気のお手伝いをする場所だと思います。そんな温泉が私は大好きです。今回の探偵団で、笑顔と光と雰囲気について考えました。温泉では、東京タワーから夜景を眺めるのとは違い、光自体が人の笑顔を創るのではありません。光は、人の笑顔の雰囲気づくりの助っ人をしているものだ、と感じました。



3



4

7月29日の街歩きは、臨海副都心に現れた江戸文化をモチーフにした大規模日帰り温泉「大江戸温泉物語」に行ってきました。”湯けむりのあかり”をテーマに日頃の疲れを癒すことはできたのでしょうか？

笑顔は、そこで出会う人や、そこで話すこと、たつぷりのお湯、美味しいお酒に料理・・・によって、そこでは創られていました。

大江戸温泉は、癒しくエンターテイメントという印象を受けました。入場する際に、まず全員浴衣に装いを替え、縁日を憶わせる夜店のあかりに出会います。影絵の仕掛け、裸電球のあかり、湯煙のフィルター。都会の喧騒を離れ田舎の露天風呂での心落ち着かせてというよりは、日常から少し逸脱し、開放される場所、そういった印象を受けました。そういった意味で、都市的温泉空間の様に思いました。

団員一行は、唯一の混浴の足湯に、真っ先に出向きました。そこは、日本庭園になっていて、窓明かりと低位置の庭園灯、湯煙により雰囲気が創られていました。足つぼを刺激されながら、湯を味わいました。タイムスリップしたような江戸情緒あふれる場所でした。そんな中、空に飛行機が飛び交い、お台場の近代建築を望み、浦島太郎のような気分がしました。

すっかりお腹を減らした一行は、その後、宴会場へ。美味しいお酒と料理を堪能し、いい時を過ごすことができました。最後にそれぞれに温泉にはいり、すっかり笑顔になったの解散でした。(上田 夏子)



5



6

1. 唯一屋外にある足湯にて
2. 館内には江戸の街並みを再現した露店が並ぶ
3. LEDで光る蛸もいます
4. すっかり疲れを癒した後の集合写真
5. エントランスもご覧の通り
6. メインのお風呂前

第22回 研究会サロン 2003年08月11日

街歩き、NY・ライトフェア、バリ・リゾートホテル調査報告、
北米照明学会受賞報告など

8月11日のサロンでは、大江戸温泉物語の街歩き調査報告、NY・ライトフェア、バリ・リゾートホテルの海外調査報告、名古屋の”オアシス21”というプロジェクトでLPAが北米照明学会賞を受賞したことなどが報告されました。

■サロンレポート・その1

今回は私にとって初めてのサロン参加でした。照明探偵団には、本当に多くの人に参加していることを、はじめの自己紹介のときに感じました。

オアシス21の入選のお話や、みなさんが持ち寄った「ヒカリモノ」のお話もとても興味深く聞くことができました。

私は環境デザインを大学で勉強している学生なのですが、照明探偵団のサロンや街歩きに参加する度に、学校では勉強しないことを実際に見たり聞いたりするのがとても刺激的です。また「光」をキーワードに、興味をもったひとたちがいろいろな興味や考えをもちよって話す機会がある照明探偵団は毎回楽しみです。

今回は私もぜひみなさんに紹介したいことがあり、夏至の日に行われた「100万人のキャンドルナイト」というイベントを紹介する時間をいただきました。

「100万人のキャンドルナイト」というイベントは、その名の通り100万人を目標に夏至の夜に20時から22時まで2時間全国でライトを消し、キャンドルのもとで過ごそうというイベントです。東京タワーや沖縄の首里城のライトもその2時間にあわせライトダウンがおこなわれたり、神社をキャンドルによってライトアップするイベントなど各地で様々なキャンドルナイトに合わせたイベントが行われました。このイベントに参加するにあたってひとそれぞれこめた思いは様々ですが、意識的に人々が照明を消し、キャンドルのもとで時間を過ごすというところに私はとても魅力を感じ広報のお手伝いということで参加しました。そのことを「光」に注目している照明探偵団のサロンで紹介する機会があり、この輪がどんどん広がっていけばよいなと思いました。再び冬至の日にキャンドルナイトが行われる予定なのでみなさんぜひ一緒にキャンドルナイトを過ごしましょう。(遠藤 美季)



広島県尾道市大学生による神社でのキャンドルナイト



サロン会場でのディスカッション風景

■サロンレポート・その2

今回は、お台場の大江戸温泉街歩き、NYライトフェア、バリ、ミルウォーキー美術館、オアシス21、のそれぞれの報告と、「100万人のキャンドルナイト」の紹介がされました。

大江戸温泉街歩きの報告から始まり、心は昔なつかしの日本風景の再現・舞台としての劇空間に安らぎを覚えたかと思いきや、その後の報告では、NY、BALI、MILWAUKEE、と世界中を飛びまわる国際的な報告で、今回も盛りだくさんな楽しい時間が過ぎていきました。

海外旅行経験の少ない私にとって、海外事例の報告は特に興味深く、今回のたくさんの報告は私の旅行欲を駆り立たせるものばかりでした。その中でも「バリ島の光」報告では、現実逃避リゾート地という特殊な世界での光環境ということでもとてもおもしろかったです。技術的には素朴で大雑把な光環境であるのに「バリ」という空間では、裸電球もそれが正しく、橙に染められる部屋のあかりは自然の夕日の名残に見えました。

そののちに聞く、ところ変わって MILWAUKEE 美術館・オアシス21 報告では、バリとの時代も変わったような近代最先端建築な報告で、まだ来ていない近未来を見ているような錯覚がありました。

最後に「電気を消して、キャンドルの灯で夜を見つめてみませんか？」といった「100万人のキャンドルナイト」の報告があり、報告会は終了しました。

楽しい時間に満身に帰ってからは、さっそく「100万人のキャンドルナイト」に参加し、家中の照明を消して、キャンドルのあかりだけでゆったり時間を満喫しました。ちいさなことで光の暖かみ、大切さをしみじみと感じられる素敵な時間となりました。(坂上 真理)

照明探偵団員レポート

ロンドン照明探偵

今をときめく建築家の現代建築や歴史的建造物の数々もさることながら、美しい自然と光の移ろいに心を奪われ続けている。ロンドンに滞在して9ヶ月の照明探偵団員・森本博美さんにそんなロンドン生活の日常で、日本とちょっと違う？と感じた小さな驚きをレポートしてもらいました。

■まずはフラットやオフィスを観察！

朝日が当たると、白熱灯が点灯したかと錯覚さえ覚える黄色の壁色は、暗く長い冬を快適に過ごしたいロンドンではポピュラーな内装色である。kitchen や bathroom の照明は、ハロゲンの可動式ダウンライトで、華やかなハレの場の扱いを感じる。bathroom の照明のスイッチは cord-pull 式。濡れた手での感電防止に有効。何せ 240V なのだ。コンセントには on/off スwitch が必ずあり、3極式プラグはヒューズと、アースを内蔵する。

古い石造りの建物の中にある小さなオフィスは、フロアスタンドによるアッパーライトでアンビエントをつくり、タスクランプまでも壁に向けて照射し、間接照明のみで仕事をする風景さえ見かける。



オン・オフスイッチ付きコンセントとプラグ

■街歩きして

建築の学校の授業で話題の新建築を訪問し、素晴らしい光の設計に多く出会った。'良い建築'の評価は'良い光環境かどうか'に全てがかかっているのでは・・・とまで感じてしまう。

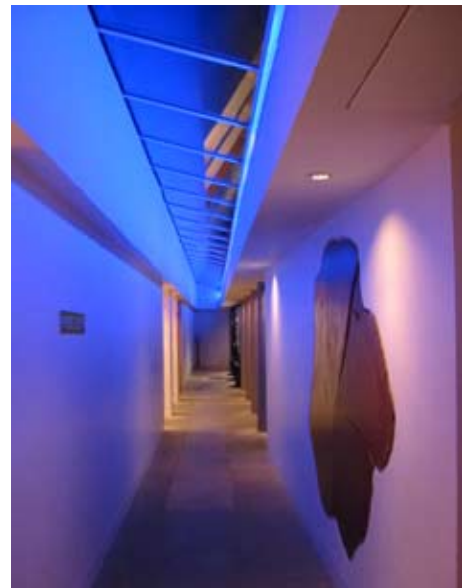
また、物販店や飲食店は光をうまく使いこなし、カラーライティングも多様に用いて光でのびのびと絵を描くようだ。色光は建築内部でも結構頻繁に用いられている。たまに乱暴な色付きライトアップに遭遇し、啞然とするが、それもまたご愛嬌？

日本では'ちょっと特別'な感のあるシャンデリアはかなり'あたりまえ'の存在で、様々なデザインのものがあり、こんなところ！？というところにも登場する。仮設テントにさえ、とりつけられるのだ。シャンデリア球の種類が多いのはさすが。キャンドルも、あたりまえの存在で日常の消耗品。

■新旧の魅力的な調和

スコットランド中部にある 13 世紀建造の白亜の美しい城 Blair Castle での晩餐会に招かれた。ここは英国で唯一プライベート・アーミーを持つことを認められたアソール公爵の居城。同席した建築家の Jamie Troughton 氏が「Lighting は大変重要な要素なんだ。」と言いながら氏の設計した改築部分を案内してくれた。改築部分は観光客のための飲食やショップスペースとして用いられている。

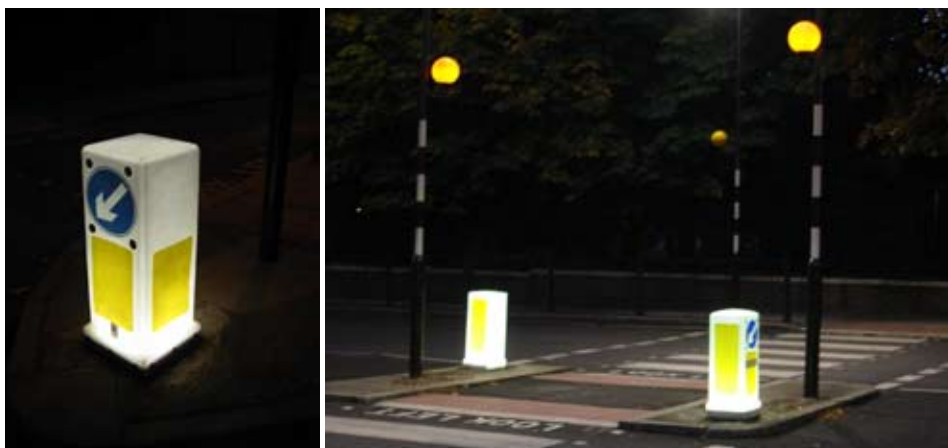
古い建物と、カラーライティングを巧みに取り入れたモダンな建築が見事に調和し、美しい一言だった。新旧の建築物が混在しながら、チャーミングな街を形成するロンドンと思いが重なる。興味が尽きないロンドン、これからもっとみつめて行きたい。(森本 博美)



Blair Castle の新築部分。もとはとても gloomy だったという。



テントにもシャンデリア



わかりやすい道路標識は夜道の明かりも兼ねる

面出の探偵ノート

●第33号 2003年10月17日(金)

スカンジナビア、どうして心休まるのだろう・・・?

8月末にLPAの仲間や武蔵美のゼミ生と一緒にストックホルムとヘルシンキを訪れた。私にとっては多分4~5回目の北欧の旅だったが、初秋の好天に恵まれたせいもあって、随所に気持ちの休まるひと時がある、そんな時間の連続だった。どうして心休まるのだろう。

私にとってこの「どうして」には幾つかの推論が成り立つ。一つはスカンジナビアの気候のせいだ。とりわけここ数年は毎月赤道直下の街(実は北緯1度に位置しているらしいが) Singapore や、Bangkok に出張しているので、その熱気や湿度が体内感覚として染み付いているに違いない。そのとろけるような熱気を帯びたトロピカル・シティの喧騒も嫌いでないが、やはり赤道付近の街では太陽光をいとおしく見つめたり、夕暮れの暮れなじむ時の移ろいに感傷的になったりすることはほとんどない。ところがスカンジナビアでは毎日のように太陽光との恋に落ちていた。心が締め付けられるような時間帯にたくさん出会うのだ。二つめの理由は多忙な日程表からの逃避かも知れない。日本での毎日はもとより海外への出張の時さえ、30分と間隔のあかない詳細な業務日程が詰め込まれる昨今。特にレギュラーに大学に行くようにしてからは、大学の研究室にいる日にさえ、30分単位のゼミの授業や学生指導面接などが数珠なりになっている。スカンジナビアに行った時には、そのような詳細日程に管理された毎日から概ね解放されていた。もちろん暇な時間を過ごしたわけではないが、時間の流れにストレスを感じない。時間の密度が優しいのだろう。三つ目の明らかな理由は、北欧の人たちとの相性のいい人間関係だ。ステレオタイプ的に人間の相性を語るつもりはないが、最近は中国系の人たちとの仕事が増えたせいも、彼らとのたくさんの会話の後には極度に疲労する事しばしばである。中国系英語の聞き取りにくさも手伝って、Singapore に出張すると、その一日の長く疲れることと変わらない。失礼な言い方を敢えてすると、中国系の人たちと意気投合し心割って話すような機会がとても少ないのだ。どこかで人間関係の違和感を引きずっている。それがスカンジナビアの人には殆ど感じない。いくらかの昔からの友人も含めて思い起こすと、「北欧に悪い人はいないのか・・・」という冗談を言いたくなるほど、彼らとの会話には心通うことが多い。私は極端な

北欧ひいきなの? でも、この件については私だけでなく同意してくれる友人はたくさんいるのだ。日本人とスカンジナビア人との気質や生活のメンタリティが似ている、と言ったら反論されるだろうか。

そんなわけで、9日間ほどの北欧滞在だったが気分は最高だった。先ず初めにストックホルムに入り、Transnational Lighting Detectives Forum 2004 in Stockholm に参加した。このフォーラムの詳細報告は他の団員がする事になっているのだけれど、昨年のTokyo大会に次いで2回目という事で、大きな期待がかかっていた。Aleksandra というストックホルム支部の友人の奮闘努力のかいがあつて、前夜祭から本番のシンポジウム、エキスカージョンのポートツアーや最後の晩餐まで・・・、とても心のこもった時間をおくることができた。NYから、Hamburg から、Singapore から、そしてCopenhagen からも志を同じうする友人が集まり、「住宅照明」についてそれぞれの現状と特徴的事柄を報告しあう。それぞれの街や国柄の違いは、そのまま住宅照明の現状に現れている。私は学生と一緒に調査研究した日本の住宅照明の現状を報告したが、私達の蛍光灯に支配された住宅照明の現状を、欧米の友人たちはどのように受け取ったのだろうか。各地からの発表はそれぞれに个性的で、相互の発表内容を比較することが楽しかった。このストックホルムでのフォーラムの大成功は来年3回目のハンブルグ大会への期待に繋がっている。

ゼミ学生と海外で一緒に時間を過ごせた事も新鮮な経験だった。私にとって昨年からはじめた学生諸君との付き合いは、羨のいい息子や娘が、急にたくさんできてしまったようなも

のだ。羨の悪い学生は相手にしないようにしている。学生にとっては当然、私は親父ではないのである程度の必要な距離をおいて私を観察している様子だ。今のところ私はその距離感をとても好んでいる。私に対して失礼な態度は許されるはずもなく、私から何かを吸収しようという鋭い眼光を感じる時には、訳もなくそれに応えてしまう。若い社員と私との関係式とも異なる。妙な関係だな、と自分で感じる事も多い。北欧の街を彼らと一緒にみて回るだけでなく、むしろ東京にいるときと同様の話題でも、夕暮れ時のヘルシンキのカフェで話すと、全く異なる会話と結論になってしまう。カフェを飲み、ビールをお代わりし、ニシンの酢漬けやミートボールを頬張るごとに、地球の反対側で同じ空気の中に浸っている事を連帯する。その事が大切であり、かけがいのない大切な思い出を積み上げている事の喜びを感じているのではないか。いずれにしても彼ら学生が同行したのも「心休まる旅」の原因に加えられるかもしれない。私が先入観をなくし無垢になればなるほど、学生の視点に学び取る事は多くなる。学生に語りかける時に自分自身に気合を入れていることも多い。

スカンジナビアはこれからも何度も訪れたい地球の部分である。心休まる・・・と思えるうちには多くの事が学習できるかもしれない。来年の春と秋にもスウェーデンでのワークショップに招かれている。北欧との心休まる関係が継続してくれる事を願っている。アルバ・アアルトの設計したレストラン・サボイから見たヘルシンキの夕陽とブルーモーメントが忘れられない。そうそう濃厚なきのこのスープとナカイ肉のソテーが絶品だったことを、今でも鮮明に思い出す。

(面出 薫)



ストックホルムからヘルシンキへ向かう船から



スカンジナビア 晴天の一日

富山県・国宝瑞龍寺 ライトアップ！

8月6日から10日の5日間、富山県高岡市の国宝・瑞龍寺をライトアップする「たかおかイルミナイトイリュージョン2003」が行われ、その監修を面出団長が行いました。5日に行われた照明実験では境内の山門、仏殿、法堂、回廊など白熱を中心に温かくやわらかな光で照らし、江戸初期を代表する禅宗伽藍が闇夜に美しく浮かび上がりました。また、大茶堂を会場にいつもとは少し趣を異にした講演会も行われました。



あたたかく柔らかな光で照らし出された国宝・瑞龍寺



大茶堂を会場に行われた面出団長の講演会

★★投稿募集中★★

照明探偵団通信 vol.18 (次号) の原稿を募集しています。独自の照明探偵レポート、光に思う今日の日本、照明について知りたいこと、疑問に思っていることなどなど、テーマは何でも結構です。日頃ひかり、あかりなどについて思っていることや様々なレポートを照明探偵団通信に発表してみませんか。原稿は、e-mail で送付して下さい。メール上記述でも原稿テキストファイル添付でもOKです。投稿お待ちしております！

照明探偵団・事務局
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-28-10
ライティングプランナーズ アソシエーツ内
TEL : 03-5469-1022 FAX : 03-5469-1023
e-mail: tanteidan@lighting.co.jp <http://www.lighting.co.jp/tanteidan/>

【照明探偵団の活動は以下の22社にご協賛いただいております。】

ルートロンアスカ株式会社 岩崎電気株式会社 小糸工業株式会社 株式会社菱見 カラーキネティクスジャパン株式会社 松下電工株式会社 株式会社ウシオスペース ヤマギワ株式会社 山田照明株式会社 マックスレイ株式会社 ニッポ電機株式会社 株式会社エルコ・トートー株式会社 ウシオユーテック 日本フィリップス株式会社 トキ・コーポレーション株式会社 東芝ライテック株式会社 大光電機株式会社 金門電気株式会社 小泉産業株式会社 マーチンプロフェッショナルジャパン株式会社 湘南工作販売株式会社 株式会社遠藤照明

照明探偵団日記

最近夜空を見上げていますか?? 中秋の名月は過ぎてしまいましたが、この季節はいつもより月が美しく感じられるような気がします。それにはやはり理由があるようです。月は西から東へと移動しているため、月の出の時刻も毎日約50分ずつ遅くなっています。ただ、秋分前後にはその遅れが約半分になる日が数日あるので、それ程待つことなく、地平線からの高さもちょうど良い状態で月を見ることができるとか。また、太陽光と比較してその強さがわずかに50万分の1ほどという月は、大気の影響をとっても受けやすい。そのため、月光の色も高度が低い夏の月は朝日や夕日と同じ原理で大気中を長く通って赤みを帯びていますが、秋になって高度が高くなるにつれて金色から銀色へと変化していきます。この時期にひときわ満月が美しく、月光が澄み渡って見えるのにはわけがあったんですね。秋の夜長、身の回りのとりあえず消せるだけの人工光は全て消して、たまには月を愛でるなんてことをしてみたいかがでしようか。

(田沼 彩子)